

## 題目

「自己志向・他者志向エゴグラム作成の可能性」

## 著者

西川和夫\* \*三重大学

## 分類

理論研究

## 掲載誌

交流分析研究（日本交流分析学会） 1993年 第18巻第1号 pp.37~45

## 問題および目的

交流分析の自我状態理論にある自我状態の機能的モデルに、心理的エネルギー志向性の概念を導入した2次元志向性モデルを提案する。自我状態の機能強度を視覚的に表示する方法としてデュセイによりエゴグラムが考案された。デュセイの直観的観察に基づくエゴグラムに触発されて、その後質問紙形式の自己評定エゴグラムが開発されてきた。いずれも、CP（支配的親）、NP（養育的親）、A（成人）、FC（自由な子ども）、AC（順応した子ども）の機能的自我状態を仮定している。エゴグラムを利用した症例の診断的解釈を調べると、心理的エネルギーが自己を対象とした活動に供給された状態（自己志向）と、他者を対象として行う活動に供給された状態（他者志向）の混在した記述が多く見られる。また、質問紙エゴグラムの尺度項目を見ると、AC尺度だけが自己志向的な機能を表す内容になっており、他の下位尺度は暗黙に他者志向的機能に関わる活動を測っている。さらに、同じ機能的尺度であっても、他の自我状態機能との組み合わせで自我機能の志向性が変化するような診断解釈が見られる。たとえばデュセイのW型を示す「自殺者」のエゴグラムタイプでは、ACとともに高いCPは「激怒を自分に向ける」、「自分のあらをみつけること」に機能すると説明されている。このときのCPは自己志向的機能状態と考えられている。暗黙のまま、自我状態の機能が自己志向的と解釈されたり他者志向的と解釈されることは、尺度の一義性を曖昧にする要因となる。本論文では、すべての機能的自我状態の活動に供給される心理的エネルギーの方向に、自己志向方向と他者志向方向を仮定した。自己志向（I）は、心理的エネルギーが、自己を対象とした行動・思考・感情に向かう傾向を意味し、他者志向（U）は、心理的エネルギーが他者および自己を取り巻く外界を対象とした行動・思考・感情に向かう傾向を指す。自我状態の機能的モデルに心理的エネルギーの志向性概念を導入することによって、CPからACまでの機能的自我状態ごとに、自己志向的心理機能の活動水準と他者志向的心理機能の活動水準を独立に測定する手段が得られる。

## 結果および考察

本論文は純粋に理論的提案を行ったものであるため、実証的結果は含まれない。すべて考察に該当する内容である。

自己志向・他者志向機能的自我状態の定義：自我状態の機能的モデルに整合するように、

自我状態の自己志向的機能と他者志向的機能の定義を行った。CP（支配的親）の心理的エネルギーが自己志向する ICP は、「自己を「自己内に取り入れた支配統制する親」の基準に適合する望ましい状態にさせるように統制する機能」であり、他者志向する UCP は「他者を「内在化した親」の基準に適合するように統制する機能」であると定義される。NP（養育的親）の心理的エネルギーが自己志向する INP は、「自己を「取り入れた慈しみ育む親」がケアするように機能」し、他者志向する UNP は「他者を慈しみ育む親」のように機能する」と定義される。A（成人）の心理的エネルギーが自己志向する IA は、「自己の「いま・ここ」の現実に対応する機能」であり、他者志向する UA は、「他者とのいま・この現実に対応する機能」と定義される。FC（自由な子ども）の心理的エネルギーが自己志向する IFC は、「自己の中で「統制されない自由な子ども」のような活動が活発になるように機能する」と定義され、他者志向する UFC は、「外界に対して「統制されない自由な子ども」のように振る舞うことに機能する」と定義される。AC（順応する子ども）の心理的エネルギーが自己志向する IAC は、「自己の内面が「保護必要とし順応する子ども」のようになるように機能」し、他者志向する UAC は、「他者に対して「保護を求める順応した子ども」のようになる機能」と定義される。得点が高い尺度は、その尺度の示す機能を反映した具体的活動が活発であることを意味する。得点の低さは、その尺度機能の不活性を示す。

自己志向・他者志向と内向・外向の関係：このモデルによる心理的エネルギーの志向性は、デュセイの定義のように、観察可能な主体の行動・思考・感情を動機づけるエネルギーとして仮定している。ユングのような主体と客体間の意識と無意識に渡る複雑な相補的關係を想定していない。自己志向ではあるが、INP のように肯定的自己意識をもたらす自我機能は、客体との積極的な交流活動にも向かう可能性を包含する。また、他者志向の UAC は客体との関係維持について消極的傾向を内在させる。類似の特性を示しても、一義に自己志向を内向性指標、他者志向を外向性指標と見なすのは妥当でない。

自己志向・他者志向エゴグラムの想定応用例：仮に自己志向エゴグラムまたは他者志向エゴグラムのどちらかが同型であっても、一方のパターンが異なれば、被検者の自我機能は異なった働きを示すことになる。次に極端な対照例を示す。1) CP 優位型の他者志向エゴグラムに AC 優位型の自己志向エゴグラムが随伴した場合、被検者の自我状態機能像は、「責任感、強いリーダーシップ、熱心な指導など、自分の価値観で他者を支配しようとする傾向が強い。一方で不安や防衛的傾向が強く、自己目標に従って自己を律する傾向が乏しく、自らを省みることが少ない」という特徴が優勢になる。2) 対照的に、同じ CP 優位型の他者志向エゴグラムに自己志向エゴグラムも CP 優位型が随伴した場合には、「生き生きした生命感や創造性には乏しいが、他者から脅かされることは少なく、自信と善意に満ちて、良いと信ずる目標に向かって自ら努力し、指導性を発揮する」というパーソナリティ像が特徴となる。

自己志向・他者志向エゴグラムによる基本的構えの推定：交流分析には自己に対する肯定（I +）・否定（I -）の構えと他者に対する肯定（U +）・否定（U -）の構えという、四つの人生に対する基本的構え（Life position）が仮定されている。また、エゴグラムパターンと基本的構えに対応関係があることも指摘されている。自己志向・他者志向エゴグラムにおいては、自己に対する態度と他者に対する態度が分離・測定可能になるので、自他に対する機能的自我状態と自他に対する基本的構えの対応をより一義的に推測しやすくなる。機能的自我状態の定義に基づくと、自己肯定はINPの高さに、他者肯定はUNPの高さに、自己否定はIACの高さに、他者否定はUCPの高さに対応する可能性が想定される。四つの基本的構えを従来のエゴグラムパターンによらず、INP、UNP、IAC、UCPの相対的な得点差を指標にして簡便に数量化することができる。自己志向機能的自我尺度と他者志向機能的自我状態尺度が比較的一義に基本的構えに対応することが実証されれば、ひとつの自己志向・他者志向エゴグラムで自我機能の特徴と基本的構えに関する情報を同時に得られる可能性がある。

成長援助ストラテジーの選択：自我状態に供給される心理的エネルギーの方向が異なれば、行動・思考・感情の状態も異なり、他者との交流も異なることが予測される。人が自我状態のアンバランスな働きにより心理的適応に困難をきたし、援助を必要としているとする。そこではどの自我状態の、自己と他者のどの方向の心理的エネルギーをバランス方向に変化させるかが、適応援助のための介入課題になる。不感症の治療を求めに来たメアリーの症例で、デュセイは、容赦のない他者批判（高いCPエネルギー）の代わりに、これまで使われていなかった他人の喜びに貢献するNPエネルギーを上昇させることにより、温かくバランスの取れたパーソナリティへの変化を実現した。いわば他者志向的NP（UNP）を活性化する方法である。もしも、治療前のメアリーの低いNPが自己志向的な自我状態であった場合には、自我状態を変化させるストラテジーは非常に違ったものになる。自己志向NP（INP）を上昇させるためには、他者ではなく自分に温かなストロークを与える必要がある。自分の存在を肯定的に認め、他者を喜ばせるより前にまず自分が楽しむことを自分に許すという、自己養育のエネルギーを上昇させる介入が効果的援助になる。自我状態に供給される心理的エネルギーの特性に応じた細やかな対応がより効果的な心理的援助になる。

結論：自我状態の機能に心理的エネルギー志向性の概念を導入することで、両面的な自我機能の測定が可能になり、主体の心理的エネルギー特性に配慮したより適切な治療・援助・指導がもたらされると考える。

（要約者：西川和夫）